



114
A 1373



傳ナル者ナニ該原ヲ閑墾セントシ土エヲ起シ
 難カラサル地形ニ有之曾テ旧盛岡藩士新渡戸
 波シテ水田ヲ興スモ縦横運河ヲ通スルモ敢テ
 ナシ若シ善リ水利ヲ設クルニ於テハ全野ニ灌
 ニ非レド散テ瘠硬ニシテ耕スヘカラサルノ地
 遮キルナク墾子平坦ナリ而シテ兵地質膏腴ト云
 小河原湖ヲ男ニ其間九畝萬畝町歩大陵巨澤ノ
 一ト東南奥入瀨川ト大洋ヲ界ヒ之西北七戸川ト
 無慮六萬畝町歩ト云^{山林湖}而シテ原野相接續
 一大區域ヲナスモノハ即チ三本木接續ノ地ニ
 三本木原野上水閑墾之儀ニ付伺

大正十一年四月贈



遠ク水ヲ奥入願川ノ上流ニ引キ既ニ千八百年
 間ノ隘渠ヲ穿テ三千年間ノ溝渠ヲ掘リ原中村
 落ヲ新置シ稿今三本本新壑ヲナシメシニ故ア
 リ中道ニシテ其業ヲ果サス今其溝渠大ニ破損
 スルモ尚其水利ニ據リ耕作ヲナスモノ有之時
 新壑及歩ニ從事スル者言フニ新雨ノ翌年ニシテ
 其年ノ如クハ其地ナキハ原簿ヲ多クハハ足
 此経験ト実地ニ就テ之ヲ見ルニ實ニ有用ノ地
 ニシテ今日ニテ無用ノ地ニ属スルハ遺利ノ最
 モ大ナルモノト可申然レ氏閑壑ノ業タルモ
 至難ノ事ニシテ容易ニ午ヲ下シ難キ儀ニ付在
 其經過セシ處理今ニ至リ時勢ノ到ル所ハ衆人
 之ニ注目冀望スルモノ多ク稍ク諛原ヲ閑拓ス

一キ好機會ト被考候丈レ耘耕ノ方法如何ニヨ
 リ独リ水田ニ利アリトナスヘカラサレ凡ソ
 日本農家ノ羨慕スルハ専ラ米作ニシテ苟モ水
 ノ汲リ所ナク地ト雖モ之ヲ田ニナスハ從來経験
 上ノ得失ト慣習トニ因リ一意ニ傾向スルモノ
 ニシテ素ヨリ誣ユヘカラサル伎ニ有之年ヤ米
 價騰貴耕作ノ利倍ス米ニ帰スルカ如ク而シテ
 地方ノ如ハ從來大豆ヲ作り其利を僅々タル
 カ故ニ陸田ノ水田トノ比較最モ大差アリ加ル
 ニ水田是夕多シキヲ以テ人民ノ水田ヲ熱望ス
 ルモノ今日ヨリ甚シキハ無之其機ニ投シ水利
 ヲ設クルニ放ラハ必ス荒蕪ヲ變シテ田トナシ
 大豆ヲ廢シテ米トナスハ昔テ疑ヲ容レサル所

然レ氏人之シリ地廣シ現在ノ人ニシテ悉リ拓
キ得ヘキ面積ニハ無之候得共人心ノ向フ所ナ
レハ月ヲ追ヒ年ヲ重子ハ漸ニ移住開拓スルニ
相違有之間敷依ラ今固先ツ水線ノ高低ヲ実測
シ修築ノ費用ヲ豫算シ開拓ノ地積ヲ概測セシ
ニ溝渠ノ長サ十里余ニシテ高低宜シキニ適ヒ
其費用九金七万円ヲ要シ而メ新墾スルキ地十
町歩以上畠ヲ麥ニシテ田トスヘキモノ九八百
町余ト豫定セリ右ハ僻阪ノ地ニ於テハ頗ル大
事業ニシテ其費用モ又夥シカラサレハ政府ヨ
リ特別ノ保護ヲ加ヘ去方ノ余地ヲ授ケテ以テ
之ヲ誘導奨励スルニ無之テハ到底其目的ヲ果
シ兼ル候ト存候故ニ其條件ヲ具仕シ御允許ア

ランヲヲ請求スル左ノ通
第一條 該水利ニ據リ新開スヘキ官有原野ハ
ニ十ヶ年間無借地料ニテ并借シニ十一ヶ年
ニ至リ開墾セル土地是町歩ニツキ素地代價
金壹円ノ割ヲ以テ御拂下ノ事
第二條 前條御拂下ケノ上更ニ墾下陸免年期
ニ十ヶ年間御用捨ノ事
第三條 該水利ニ因リ結場等良有ノ荒蕪ヲ開
墾スルモノハ是迄納メ未リシ該地租額ヲ以
テニ十ヶ年間御据置ノ事
第四條 該水利ニ因リ陸畠ヲ返シテ水田トナ
スモノハ是迄納メ未リシ該畠租額ヲ以テ十
ニヶ年間御据置ノ事

第五條 上水開墾ノ事業ヲ獎勵スル御主旨ニ
テ水利營築費ノ内ハ金三万円無利息ヲ以テ
別格持借ノ事

第六條 持借金返納ハ十ヶ年間据置キ十一ヶ
年ヨリ四十ヶ年マラ年賦上納ノ事

第七條 返納金額ハ其前年新墾地ヨリ社入セ
ル金額ノ半ハヲ以テ翌年ノ額トナシ毎年之
ヲ納ム若シ満期ニ至リ尚不足ハ以テ積立
金ヲ以テ悉皆上納ノ事

右ノ條項出格ノ御註義ヲ以テ即今御採用相成
ニ於テハ專ラ有志輩ヲ勸奨鼓舞シ別紙見込書
ノ主旨ニ準シ結社成功候様尽力スヘク候間僻
隅地方ノ情况深ク御洞察ノ上速ニ御允許相成

度尚官地持借及ニ潰地敷地等及別其他社則等
追テ取纏ノ可伺出依テ營築積リ書相添此段相
伺候也

明治十四年六月 青森縣令山田秀典

内務卿松方正義殿
大藏卿佐野常民殿
農商務卿河野敏謙殿

再甲上水路敷潰地別冊目論見帳之通有之
ト金氏一筆限調理未定ニ付追テ上申可致
答豫々御認可相成度此段副申候也

青森縣令山田秀典

内務卿松方正義殿
大藏卿佐野常民殿
農商務卿河野敏謙殿

再甲上水路敷潰地別冊目論見帳之通有之
ト金氏一筆限調理未定ニ付追テ上申可致
答豫々御認可相成度此段副申候也

青森縣令山田秀典

内務卿松方正義殿
大藏卿佐野常民殿
農商務卿河野敏謙殿

再甲上水路敷潰地別冊目論見帳之通有之
ト金氏一筆限調理未定ニ付追テ上申可致
答豫々御認可相成度此段副申候也

三 本木原野上水開墾方法具込書

第一 三本木原野開墾ノ為上水ノ事業ヲ興ス
一 會社ヲ設立シ株券ヲ發シ資金ヲ集ム
ル事

第二 株數ヲ二千株トシ是株金貳拾円ニシテ
惣額四万円ヲ募ル事

第三 本社ノ責任トスル所ハ開墾上水ノ為メ
官地ヲ租借拂下又ハ免租除稅等ヲ請願
シ水利ヲ經營シ道路ヲ區畫シ其他規約
ヲ定メ又ハ資金ノ支償及ヒ社入金ノ收
支ヨリ社實ニ土地ヲ割賦シ耕作者ニ開
墾ヲ勸奨スル等凡ソ全體ノ經營ニ屬ス
ル一切ノ事務ヲ專トシ開墾耕耘等ハ耕

作者ニ屬スルモノニシテ社名ヲ以テ直ニ從事セサルモノトス

但資金ノ都合ニ依リ初頭迄田土地ヲ起シテ耕作人ニ付與シ又ハ肥料種穀等ヲ周旋スルヲアルヘシ

第四 本社責任ニ屬スル事務ノ為メ他ニ對スル負債等ノ義務ハ總テ本社ノ負擔スル所トス但シ有限責任タル事

第五 上水スヘキ線路ハ新渡戸傳ノ旧堰ニ據リ中コロ大光寺堰ニ合シ之ヲ廣鑿シ之ヲ修理シ又ハ新堰ヲ掘リ海ニ至ラシムル事

第六 設水利ヲ以テ新墾地トシテ畑地交換ハ

第七 百町歩ニ灌漑ヲ要スル見込ミノ事
或功期限ヲニ十ヶ年トシ解社期限ヲ四
十ヶ年トスル事
但シ運歩ノ運送ニヨリ事業及ヒ本社ノ義務ヲ終ル寸ハ四十ヶ年以前ニ解社スルヲアルヘシ

第八 新開スヘキ地所官有ニ屬スル者ハ無任
地料ニテニ十ヶ年特借シ其開拓セル土地ハ素地代價迄町歩金迄田ノ割ヲ以テ御拂下ケテ請願シ其年ヨリ更ニ二十ヶ年ノ缺下年期ヲ仰キ而シ耕作者ハ六ヶ年ヨリ五ヶ年間ノ猶豫ヲ与ヘ六ヶ年ヨリ五ヶ年間ハ毎年産及歩ニツキ

金貳拾五銭ツ、十一ヶ年ヨリ五ヶ年間
 ハ五年金三拾五銭ツ、十六ヶ年ヨリ五
 ケ年間ハ毎年金六拾銭ツ、合金六円ヲ
 工費支償ノ為メ本社ハ収入ノ事
 第九 私有ニ属スル林場等閑墾スル分ハ其年
 ヨリ二十ヶ年間是迄ノ租額据置キテ請
 願シ而メ耕作者ハ五ヶ年間ノ猶豫ヲ與
 ヘ六ヶ年ヨリ十ヶ年間毎年金六拾銀ツ、
 合金六円ヲ本社ハ収入ノ事
 第十 畑地ヲ変シテ田トナス分ハ其年ヨリ十
 ニヶ年間是迄ノ畑成租額据置キテ請願
 シ而メ耕作者ヘ二ヶ年間ノ猶豫ヲ與ヘ
 三十ヶ年ヨリ十ヶ年間毎年金六拾銀ツ、

合金六円ヲ本社ハ収入ノ事
 第十一 持借系野ノ閑墾期限ハ二十ヶ年以内私
 有林場等ノ閑墾及ニ畑返シノ期限八十
 ケ年以内ニ之ヲ以テ功スル事
 第十二 土工費金七萬円ノ内政府ヨリ土工完
 備シ人民ヲ誘導スル為メ金五萬円ヲ以
 テ持借シ其他四萬円ハ社員ニテ負擔ス
 ル見込ノ事
 第十三 工事ヲ二段ニ分テ上水口ヨリ閑墾地ニ
 至ル迄ノ一段ハ持借金ヲ以テ之ニ充テ
 其下流ニ属スル一段ノ費用ハ株金ヲ以
 テ之ニ充ル事
 第十四 持借金返納ハ十ヶ年間据置キ土ヶ年以

後新墾地ヨリ生スル社入金前年入額ノ
半數ヲ以テ翌年ノ納額トシ其半數ハ社
費豫備費ニ充テ四十ヶ年ヲ以テ返納皆
済スル事

第十五 株金割戻シハ五ヶ年間据置キ六ヶ年以
後富返シヨリ生スル社入金前年入額ノ
半數ヲ以テ翌年返納ノ額トシ其半數ハ
社費豫備費ニ充テ二十ヶ年ヲ以テ皆済
スル事

第十六 新墾及ヒ島返兩業ノ達成ニ因テハ持借
金返納又ハ株金割戻シ共定限ヨリ速ニ
皆済スルヲアルモ其定限ヨリ遅延スル
ヲナキヲ要スル事

第十七 該工ハ旧渠ニ據リ可成費用ヲ撤却シ
或ハ島返等專ラ目的ヲ確定ニシ衆人ノ
信用ヲ得ルヲ主旨トシ又ハ其得失ヲ実
験セシメ畢竟本社ヲ擴張シ大ニ企図ス
ル所アラシク要ス

第十八 該水路ハ公同物ニ屬シ一社ノ專有トナ
スヲ得サル事

第十九 該水路ノ修理又ハ看守等ノ費用ハ初メ
五ヶ年同ハ本社ノ專ラ負擔スル所トシ
六ヶ年以後ハ水下各村ノ協議ニ付スル
ヲ要スル事

第二十 上水ノ積量ヲ以テ千八百町歩ニ灌漑ス
ルモ太ナル不足ナカルヘシト雖モ若シ

経歴中實際不足ヲ生スルカ又ハ上流ノ
 肉墾多キヲ加ヘ下流ノ不足ヲ生スル場
 合ニ至レハ更ニ中振村地内ヨリ一糸ノ
 上水ヲナシ中途ヨリ存渠ニ合シ下流ノ
 水量ヲ増加スルニハ多クノ費用ヲ要セ
 スシテ容易ニ工事ヲ為スヲ得ヘシ
 第廿一 該地方地廣ク人多シ近傍ノ村民ヲシテ
 十町歩ノ新墾ヲナシ得ルハ其能
 サル所ト雖モ其三分ノ一ハ現在ノ人ヲ
 以テ拓クヲ得ヘシ其二分ハ月ヲ進ニ年
 ヲ童子漸々移住開拓ヲナサシムル目途
 トス
 第廿二 該水利ニ因リ畑ヲ變シテ田トナスハ其

利ヤナキカ如シト雖モ該地方ハ原野ニ
 富メルヲ以テ余力ハ及フ所口更ニ畑ヲ
 興スハ必然ノ事トス
 第廿三 社實ハ志株ニツキ原野地千五百坪ノ配
 當ヲ受ヘシ而シテ其利トスル所ハ株金並
 祐丹ハ年賦償却ヲ受ケ配當ノ地所ハ成
 功年間ニ開墾スルニ於テハ畢竟私所有ニ
 歸スルヲ以テ自ラ之ヲ耕シテ利ヲ得ル
 モスハ之ヲ賣却シテ價ヲ得ルモ株主ノ
 自由ナルナリ
 但シ成功期限内ニ開墾セサルモノハ
 之ヲ返納スルハ勿論ノ事
 第廿四 原野ノ地質素ヨリ好悪ノ差等アリ株主

一 配当スルニ当テ其差等ヲ公平ニスル
 方途ナカルヘカラス其方法ハ最初ニ地
 質ヲ調査シ其等位ヲ定メ而シテ償却ノ金
 額ニモ差等ヲ設ケ可成公平ト得セシム
 ルト抽籤ヲ以テ公平ニ割賦スルニアリ
 斯ノ業ハ創業ヨリ解社迄数年ニ跨リ株
 主又ハ耕作者ハ数百人ニ涉リ其除多ク
 ノ事故障害等アルハ必然ナリ其廳ニ
 於テ其監督獎勵ニ尽力スルハ勿論ニシ
 テ或ハ請願ニヨリテハ別格ノ保護尽力
 ラナスハ必要ノ事トス

右之通ニ候也

際表凡例

一 新墾及別ハ原野開墾及別ノ割合ヲ示シタル
 モノニシテ初年ハ上水工ノタメ之ヲ除キ
 二年ヨリ二十年^期迄十九ヶ年間ニテ千町歩
 ヲ開拓シ終ルトシ前年ニ開リモノナリシ
 テ未年ニ増加スル割合トシ際表ス
 一 畑区及別ハ畑ヲ変シテ水田トナス割合ヲ示
 シタルモノニシテ二年ヨリ九年マテハヶ年
 ニ八百町ヲ返シタルトシ其他前項ニ同シ
 一 新墾収金ハ新規開墾地ヨリ社入スル土工支
 償費ノ割合ヲ示スモノニシテ新墾ノ年ヨリ
 五年間措置キ六年目ヨリ五年間ハ毎年志及
 歩ニツキ金拾五銭十一ヶ年ヨリ五年間ハ

金三十拾五銭十六ヶ年ヨリ五年間ハ金六十拾銭
ツ、ニシテ十五ヶ年間ニ金六円ヲ土工支債
費トシテ収入ノ見込ヲ以テ上段新墾及別ノ
割合ニ應シテ豫算ス

一畑区収金ハ畑ヲ変シテ田トナスヨリ社入ス
ル土工支債費ノ割合ヲ示スモノニシテ畑ヲ
返シタル年ヨリニヶ年間据置三ヶ年目ヨリ
十ヶ年間年々進歩ニ付金六十拾銭ツ、金六円
ヲ収入ノ見込其他前項ニ同シ
一持借金返納ハ政府ヨリ持借セル資金三万円
返納ノ割合ヲ示シタルモノニテ持借セシヨ
リ十ヶ年間据置十一ヶ年目ニ至リ其前年新
墾地ヨリ社入シタル金額ノ半ハヲ本年ノ上

納額トシニ三十ヶ年賦ニテ皆返納ノ積ヲ以テ
豫算ス

但開業四十ヶ年ニ至リ返納スヘキ金三
百八十拾八円七拾五銭ノ所其前年ノ半額
金当百七拾四ナレハ其不足金百拾八円
七拾五銭ハ積立金ヲ以テ之ニ充トス
一株金債却ハ株金惣額四万円ノ返却ヲ示シタ
ルモノニテ初年ヨリ五ヶ年間ハ据置キ六ヶ
年目ニ至リ其先年畠返シ地ヨリ社入シタル
金額ノ半ハヲ本年ノ返却金トシ十五ヶ年賦
ニテ皆済ノ積ヲ以テ豫算ス
但開業二十ヶ年ニ至リ皆済金七十七
百五拾八円ハ本社積立金ヲ以テ一時ニ

其不足金 = 充ル積リ

一 積立豫備ハ本社ノ積立金豫備金ヲ示シタル
 モノニテ新墾及ヒ如返ニヨリ社入スル前年
 ノ額ノ半ハヲ返納及ヒ株金支償 = 充テ其
 額ヲ本社積立金豫備金トナシ其幾分ハ社費 =
 充テ幾分ヲ積置キ返納支償等ノ不足ヲ補フ
 積ニテ豫等ス

但シ如返ニ収金ノ内四年目ノ分ハ償却
 期限前ナルヲ以テ惣テ積立豫備金 = 組
 入ル且初年五ヶ年間ハ社費 = 充ルモノ
 ナシ然レモ畢竟社入金ノ贏年ヲ以テ返
 却ス一キ目途アルカ故ニ株高ニ應ジ別
 = 一時出金スルカ又ハ如ヨリ一時借入

ルカ社費ノ概数 = 委スル見込

